



たいしも通信

いきなり始まった自衛隊の装備シリーズその2、陸自編。陸自というと、やはり戦車を避けて通ることはできません。

◆そもそも、戦車とは

戦車というと、ごつい鋼製の車体に大砲がついた旋回式の砲塔、そして履帯(キャタピラー)というのが一般的でしょう。英語表記でタンクと言うのは発祥の地、英国において、新兵器を秘匿するために水槽(IIタンク)と称したというのが定説ですが、開発組織が同じく秘匿するために「水運搬車(ウォーターキャリアー)」となり、W.C委員会というのはいくらなんでも、ということもあつたそうです。

なお、日本では戦後、軍事用語を忌避する、などとして「特車」などと呼んでお茶を濁していましたが、昭和37年から正しく「戦車」と呼ばれるようになりました。

◆10(ヒトマル)式戦車

陸自の最新式戦車といえば10式戦車ですが、ほぼ同じ時期に世に出た「16式」はどうした?と思われる方も多いと思います。こちらは正しくは16式機動戦闘車で、戦車と同様の大口徑砲と立派な砲塔を持っています。正式には戦車ではなく、戦闘車に分類されるそうなので、今回は触れません。

10式戦車は陸自の61式、74式、90式に次ぐ4代目の国産主力戦車で、装備化年度が2010年度となることからこの名称となりました。

最大の特徴が日本の戦車・戦闘車両として初めてC4Iシステム(軍用の情報処理システム)標準装備となっていることで、これにより、戦車同志はもちろん、航空機や、場合によっては艦

艇とも情報交換を行うことができるというものです。

無線通信だけじゃだめなのか?と思う方もいると思いますが、昨今の戦場ではデータを共有することにより、効果的な攻撃や、別のセンサーが捉えた情報により被害を避けることができるというもの。既存の戦車に搭載するには無理があり、またオプションがついている外国製戦車では大きくなり過ぎる、というのが10式開発の主目的だそうです。

その大きさについてですが、先代の90式と比べると、全長で38cm、全幅で16cm、重量に至っては約6トンも軽く、50トンを超える重量となったため、日本の道路事情において、移動や展開がはるかに容易になり、鉄道輸送も可能になりました。

その分小ぶりで、防御力を危ぶむ声もあるようですが、実際には複合装甲をはじめ、近代のイラク戦争における教訓等も考慮された最新のものとなっています。

戦車の黎明期においては、戦場で初めて見た敵兵士に恐怖心を与える、という役目もあったようですから、小ぶりで、ある意味諸外国の戦車の中ではかわいらしくさえ見えることから、やや頼りなく思う人もいるかもしれません。しかし10式は日本の国土にマッチすると同時に、世界最新鋭の車体であることは疑いのないものなのです。

▼編集後記▲

C4Iと聞いてまだピンと来ない方も多いと思いますが、例えば航空機や艦艇から敵軍艦をミサイル攻撃する際、単発攻撃では対処されてしまう場合も多いため、データリンク等によりバラバラの場所、ビークルからミサイルを発射し、着弾時間を秒単位で合わせたりして敵を対応不能にしたりします。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあります。特に規則等に定めているもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。